



子どもから大人へと、少しずつ成長していくその過程の中で、自分が暮らしている地域資源（大人、お店、地域行事など）が支えとなっていたと実感を持つ人は、どのくらいいるのでしょうか。幼稚園や小学生の頃とは異なり、中学生以降になると、時間の使い方や行動範囲の広がり、また、思春期に入ることによって地域とのつながりは疎遠になっていきます。

しかし、こういった世代の若者たちのことを気に掛けている地域の大人たちも少なからずいます。両者がうまく出会い、地域の中で若者たちが育っていくことを実感できる仕組みを作りたい、そんな想いから生まれた取組みが、地域通貨「べる」です。

地域通貨「べる」は、山科区の中高生年代の若者が地域イベントや事務作業など、地域の中で誰かのために活動をするともうることができ、地域の中でお金代わりに使うことができる仕組みです。大阪府箕面市の地域通貨の取り組みを参考にして平成27年8月に始まりまし

## 「べる」の活動の概要



区民まつりでの工作ブースにて。大人の方から道具の扱い方なども丁寧に教えて頂きました。



おもちゃの体験教室にて。小学生以下には難易度の高い作品を中高生が手掛け、プログラムのフィナーレを盛り上げました。



活動前に説明を受け、「べる」の活動が遊びではなく、責任が伴うことだと理解した上で登録手続きをします。



終了後には報告書を提出します。受け入れ担当者からのフィードバックももらいます。



活動の条件などが書かれた求人票が貼ってある「べるハローワーク」から自分が取り組みたい活動を探します。

平成 28 年度 データ

◇登録者数 32 名

◆延べ活動数 42 件

◇発行されたべる 14,300 べる

◆協力団体 5 団体

## べるのしくみと目的

地域通貨「べる」は、京都市山科青少年活動センターが、1べる=1円の価値がある地域通貨として平成27年8月より発行しています。中高生年代の青少年が様々な活動を「えらべる」、そして活動を通して社会を「まなべる」、さらに、得た通貨で「たべる」「あそべる」のが地域通貨「べる」です。



※地域通貨「べる」の運営資金は山科青少年活動センター運営協力会よりご寄付いただいております。

## べるの目的

- 1. 青少年の働く意識の向上を**  
青少年が多様な職業観や就労意識を身に付け、自分の将来を考えるきっかけを作ります。
- 2. 地域のなかで青少年に役割を**  
青少年は対価をもらう責任と喜びを学び、自らの自己有用感を高めます。
- 3. 地域で青少年を支える土壌を**  
青少年の成長を支える仕組みを、自らの住む地域の中で作り、将来の地域の担い手を育む下地をつくります。

### ▼地域通貨をツールにする理由

社会経験が乏しく、「誰かのために」という感覚が持てなかったり、「自分は何かの役に立つことはない」という認識を持っている若者もいます。こういう状態ではボランティア活動のように、自発性や他者を意識することを根底とする活動にはつながりにくく、自己肯定感を高める機会から、より遠のいてしまうという課題があります。そういった若者にこそ、自分の可能性を高める活動機会が必要であり、その参加のハードルを

下げるのが、地域通貨の仕組みです。

最初は対価を得られることを理由に活動をしていても、そこでは自分の取り組みが評価されず、「自分にもできることがある」という実感を積み重ね、自己有用感の向上といった「今」の視点に始まり、「将来」「他者」など広く気付きを得ていくことにつながります。

そして、その受け皿として地域が一役買っことで、若者たちは、「地域に支えてもらった」という実感を持ちながら大人へと成長していきます。

### 「まちの記憶」を積む経験

人が自分の暮らしたまちに対する特別な思いを持つ元には「まちの記憶」があります。その記憶は、様々な人との関わりで生まれ蓄積されていきます。まちの誰かに怒られたり、ほめられたり、励まされたりした経験の積み重なりが、まちの記憶だと思えます。何年かぶりに地域に帰って、ある場所に立つと、当時の自分がよみがえってくることはありませんか。人とながった場所の記憶が呼び起こされるのでしょうか。

いま、地域には自営業者が少なくなり、子どもをお客様として扱うサービス業者が増えています。この非対称的な関係からは、まちの記憶は育みにくいと感じます。「べる」の活動は、意識してそのような地域の大人と子ども・若者との記憶につながる関係をつくり直そうという試みでもあるといえます。

京都市山科青少年活動センター 大場孝弘